

ユスト高山右近の生涯と信仰

91

「サン・フェリペ号事件」

マニラからやってきたフランシスコ会の修道士たちは、あらゆる警告に耳を貸さず、公然と布教活動を展開し始めました。その利己心のない貧者や病者に対する奉仕活動は、大きな感動を引き起こしました。

しかし一方では、豊臣秀吉を刺激しないように、用心に用心を重ねて行動していたイエズス会士たちは、フランシスコ会士の布教活動が引き起こすだろう災禍を憂慮していました。

両修道会のいろいろな見解の相違と活動スタイルの違いは、特に京都とその近郊において不幸な軋轢をもたらししました。

慶長元年（1596年）10月初旬、マニラからメキシ

没収を正当化したのです。増田長盛は秀吉に、サン・フェリペ号に武器が搭載されていると報告し、秀吉はこれに激怒し、京都奉行石田三成に対して、フランシスコ会士とキリシタンを捕縛し、処刑するように命じました。

秀吉による処刑命令の話は、瞬く間にキリシタンの間にもたらされ、キリシタンたちはいよいよ殉教の時代が来たと奮い立ち、準備を始めました。オルガンチノ神父は、すべてのキリシタンが嬉々として殉教をもって、キリシタンの真理を証明する光栄を待ちこがれているのに感謝し、「それらの中で、よき武士であり、真のキリストの騎士であるユスト右近殿がもつとも傑出してゐる」と述べています。

フランシスコ会士の擁護者であった長谷川法眼の息

子右兵衛は、秀吉に脅されてキリシタン名簿を作成した。その筆頭に高山右近の名前がありました。右兵衛が石田三成に名簿を見せたところ、三成は不機嫌に「なぜ右近の名前を入れたのか？ 太閤殿が右近にキリシタンの教えを捨てよと、博多で命じられたのは、もう10年も前のことだ。右近はそれに従わなかったのだから、あの時殺されても当然であった。だが太閤殿は右近の忠義を思い起こされ、領地を取り上げただけだった。太閤殿は、その後右近をお召しになり、ご好意を示された。それなのに今告発することに何の意味がある。このような名簿は認められない」と言い、右近の名前を名簿から削除し、イエズス会士を弁護して、フランシスコ会士とその同宿、信徒に名簿を限定しました。

フランシスコ会士とその同宿、信徒に名簿を限定しま

カテキズム連載

筆者が病氣療養中のため、お休みにします。

コロナ禍中でもできること ～活動紹介～

ハロハロ会とイヤリングクラブ芦屋による チャリティプロジェクト

「ハロハロ会」は1999年、フィリピン体験学習を経験した小林聖心女子学院卒業生が結成したボランティアグループ。毎年バザーやチャリティコンサートを開催し、その売り上げをフィリピン・モンタルバン地区にある教育施設「タハナン・ナン・マハルナ・プソ（みこころの家）」を運営する現地団体「聖マダレナ・ソフィア基金（SMSF）」に寄付してきた。しかし、コロナ禍の影響で対面イベントが次々と中止。

この状況下でもできる活動を模索していたところ、ハロハロ会代表の大川由衣さん（宝塚教会）から相談を受けた同校卒業生の熱海有希乃さん（夙川教会）が賛同。自身が運営するオンラインショップ「イヤリングクラブ芦屋」で髪飾りを販売し、利益を全額寄付することにした。寄付金は、移動式図書館や奨学金、教師トレーニングに必要な費用のほか、家庭で十分な食事を摂ることが難しい子どもたちのための栄養満点な給食など、主に子どもたちの教育資金に充てられる。

▼プロジェクト代表2人からのメッセージ▼

「一時的な寄付ではなく、お手元に届く髪飾りを見るたびにフィリピンの子どもたちに思いを馳せていただきたいです。」



すべて有資格リボン講師が監修した上質なオリジナルの手作り

ウェブサイト <https://earringclub.shopselect.net/>



【書評】



『なぜ、私たちは新型コロナウィルスを与えられたのか？』聖心会シスターとほめ育財団代表が贈る今、私たちが考へるべきこと（鈴木秀子・原邦雄 共著、英智舎、2020年、税込1540円）

この本は、コロナ禍の状況

下にある私たちに希望や勇気を与えてくれる。聖心会シスターのSr鈴木秀子とほめ育グループ代表の原邦雄さん（夙川教会）が共著。特に「一日一ほめ」の習慣、避けるべきほめ方、子どもに対するアクティブリスニングなど、自分や周囲の心を向上させるヒントが満載。教会や修道院に寄付することを目的として製作されたこの本は、負の感情を否定せず、むしろ受容しながらも、囚われない心で日常の「小さな支え」に目を向け、感謝することが重要だということ。コロナ禍の制限ある日々でも、明るく自由な心を保つための手引きとなる一冊だ。

「折々」―難民移住者

君はもつと甘えていいんだよ

「篤子さん、恥ずかしいけど話していいですか」。あるアフガニスタン人の若者が電話をかけたきました。

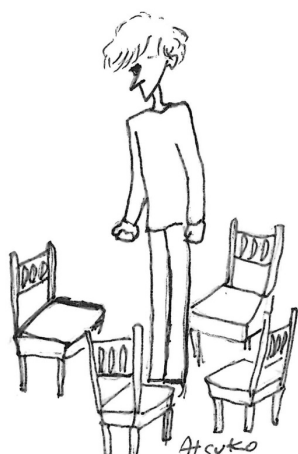
この青年は幼い頃に家族と一緒に日本へ渡ってきたのですが、本国の風習そのままに生きる家族とぶつかり、家を出て関西に移り住みました。実は、

をし、利息が膨れ上がった返済で誰にも言えず一人で抱え込んでいたのです。仕事現場が大阪になった時に大聖堂の前を通り、私を思い出し

街なかの法律事務所へ行くことになったのですが仕事の合間にしか時間が取れずトラツクの置き場に困りました。すると弁護士が「教会に置かせてもら

ました。俺やつと眠れそう」と言い、私も胸をなでおろしました。

数日後、青年は所へ行くことになったのですが仕事の合間にしか時間が取れずトラツクの置き場に困りました。すると弁護士が「教会に置かせてもら



Atsuko

私たちとともに活動した人で「困った時にはシナピスに行きなさい」と甥に連絡先を教えたそうです。

て電話をしたということでした。初めて誰かに重い悩みを聞いてもらえたときの安堵感には私にもよくわかります。青年は「よかった、軽くなり

ように言いました。「甘えていいんだよ」と青年に言った弁護士さんに私は感謝しました。

朝日新聞の「折々の

青年は金融業者に借金

朝日新聞の「折々の

ビスカルド篤子

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳細は資料をお送りさせていただきます。インターネットでもご覧いただけます。教区ホームページのこのバナーを



資料請求やお問い合わせは教区本部事務局 管理課 竹中まで ☎ 06-6941-9705



わたしは復活であり、命である。ヨハネ 11:25

